

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380885

研究課題名(和文) 公共場面における規範逸脱行動の発生過程と抑制のための授業の検討

研究課題名(英文) Investigation of the rule-breaking behavior spreading in public places and a lesson for prevention

研究代表者

出口 拓彦 (Deguchi, Takuhiko)

奈良教育大学・学校教育講座・准教授

研究者番号：90382465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)： 公の場での逸脱行動が広まる過程を、逸脱行動への他者の態度を考慮するモデルを用いて検討した。作成したモデルを基にしたコンピュータ・シミュレーションの出力(予測値)と、質問紙で測定した逸脱頻度(実測値)間には正の相関が示され、一定の妥当性を持つことが示唆された。また、質問紙データの分析により、「遵守的な態度」を持つ一部の成員が、集団全体の逸脱行動を規定しうることが示された。さらに、逸脱行動抑制のための授業案を作成し、大学生に実施した。質問紙調査によって効果を測定した結果、授業のレベルを「普通」と捉えた学生にのみ規範意識を向上させる傾向が見られ、「難しい」と捉えた者には変化は示されなかった。

研究成果の概要(英文)： The project aimed to investigate the process of rule-breaking behavior spread using a model of how to consider other peoples' attitudes toward rule-breaking behavior in public places. Questionnaires and computer simulations based on this model were conducted. Simulation outputs (estimated values) had positive correlations with questionnaire (actual) data, indicating certain validity of the model. The questionnaire also showed that some obedient members affect the frequency of rule-breaking in the group.

A lesson on preventing rule-breaking was developed and conducted for undergraduate students. A questionnaire was executed to investigate effects of this lesson. After the lesson, students who considered the lesson difficulty "normal" considered rule-breaking as more negative behavior. However, students who regarded the lesson as difficult hardly changed their attitudes.

研究分野：教育心理学

キーワード：逸脱行動 規範意識 集団 シミュレーション ゲーム理論 中学生 大学生

1. 研究開始当初の背景

(1) 規範意識と規範逸脱行動

公共の場における規範逸脱行動は様々な研究で扱われている(e.g. Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; Osman, 1982)。教育場面でも、授業中の私語、携帯電話の使用・飲食、出席の代返といった、他者の学習活動や公正な教育評価を阻害する行為など、様々なものが報告されている(e.g. 水野, 1998)。特に授業中の私語は、様々な校種で発生している(e.g. 出口・吉田, 2005; Durmuscelebi, 2010; 卜部・佐々木, 1999)。そして、学生たちは個人的には「しないことが望ましい」と思っているにもかかわらず、なぜか逸脱行動を行っている可能性も示唆されている(e.g. 卜部・佐々木, 1999)。なぜ、人々は、「好ましくない」と考えている(高い規範意識を持っている)ことであるにもかかわらず、これを行うのであろうか。

(2) 規範逸脱行動とシミュレーション

これまでの研究において、社会規範は「命令的規範」と「記述的規範」に分類されている(Cialdini et al., 1990)。後者の「記述的規範」とは、「(周囲にいる)多くの人がしている行動」(p.1015)のことであり、「『何が典型的で普通なのか』を示す」(p.1015)ものであるとされている。

Deguchi (2014)では、逸脱行動の伝搬過程における「記述的規範」の影響について、ゲーム理論(e.g., Axelrod, 1984, 1997; Scodel, Minas, Ratoosh, & Lipetz, 1959)やダイナミック社会的インパクト理論 (Latane, Nowak, & Liu, 1994; Nowak, Szamrej, & Latane, 1990)を援用したコンピュータ・シミュレーションによって検討されている。具体的には、まず、コンピュータ上に多数の「セル」(個人を表す)を配置し、個々人の逸脱行動に対する態度を数値化したものを、各セルに入力する。次に、それぞれのセルは、入力された「自分の態度」と「周囲にあるセルの行動」(逸脱行動をしているか否か)を基にして、逸脱行動をするかしないかを決定する。

シミュレーションの結果、一部の個人による逸脱行動が、周囲にいる他者の逸脱行動を「記述的規範」的な影響によって誘発し、集団全体に逸脱行動が広がっていく現象が見られた。このように、コンピュータ・シミュレーションは、「公共の場」という多様な価値観を持った多数の人間がいる場において、「個々人のふるまいは、どのようにして互いに影響を与えあい、逸脱行動を広めていくのか」という、個人と集団間の関係を検討する際に有効なものであると考えられる。

これに関連して、出口・吉田(2005)は、大学生生活の目的として「対人関係の構築」を重視する者は、自らが持つ規範意識の影響力が弱い傾向を報告している。また、卜部・佐々木(1999)は、生徒や学生が私語をするのは、(自分よりもむしろ)周囲にいる他者の態度

や期待に従っているためと考察している。これらの研究から、逸脱行動に対する自分自身の態度だけではなく「他者の態度」にも着目することは、逸脱行動について検討する上で重要であると考えられる。しかし、先のDeguchi(2014)のモデルでは、「逸脱行動を行うか否か」の判断は、「自分の態度」と「他者の行動」のみを参照してなされていた。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、「自分の態度」「他者の行動」の他に、「他者の態度」(逸脱行動をどのように捉えているのか)についても考慮するモデルを、ゲーム理論に関する研究(e.g., Axelrod, 1984, 1997)を援用して作成した。そして、質問紙調査によって測定したデータと対照しつつ、その妥当性について検討することを目的とした。具体的には、まず、「逸脱行動に対する態度」と「逸脱行動の頻度」(実測値)を質問紙で測定した。次に、得られたデータをコンピュータに入力した。そして、「自分の態度」と「周囲にいる他者の態度」および「(他者の)行動」を基にして逸脱行動をする・しないを決定するシミュレーションを行い、逸脱行動の予測値を出力させた。そして、この「予測値」と、質問紙で測定した「実測値」の関連を分析し、モデルの妥当性を検討した。

さらに、研究で得られた知見等を教材として、逸脱行動抑制のための授業案も作成した。そして、授業の効果について実証的に検討することも目的とした。

3. 研究の方法

(1) コンピュータ・シミュレーション

セル・オートマトン法を用いた。具体的には、まず、 21×21 の2次元マトリクスをコンピュータ上に作成し、441個のセルをマトリクス上に配置した。各セルは「Obeying」(規範を守っている状態)、「Breaking」(規範を破っている状態)のうち、いずれか1つの「状態」を持つ。第1ステップでは、全セル「Obeying」状態とした。

次に、各セルに「決定行列」(後述の質問紙で測定したものや、実験的に作成したもの)を入力した。これは、ゲーム理論や相互依存性理論(e.g. Kelly et al., 2003; Thibaut & Kelley, 1959)における利得行列を基にしたものである(Deguchi, 2014; 出口, 2018b)。「自分」と「周囲の他者」が「Obeying」「Breaking」の2つのいずれかの状態をとる場合、「自分はObeying、周囲はBreaking」など、 2×2 の計4つの組み合わせ(状況)ができる。「決定行列」とは、この4つの状況における自分の満足度を示したものである。例えば、5:3:1:2 という決定行列は、「自分も周囲もObeying」という状況に対する満足度は5、「自分はObeying、周囲はBreaking」では3、逆に「自分はBreaking、周囲はObeying」では1、「自分も周囲もBreaking」

では2,であることを意味する。

第2ステップ以降では,自分自身の「決定行列」(逸脱行動に対する自分の態度)と自分の周囲にあるセルが持つ「決定行列」(逸脱行動に対する他者の態度)を基に,自らの「状態」を変更ないし維持させた。「他者の態度」(逸脱行動をどのように捉えているのか)について考慮する方法ないし過程に関するモデルは,出口(2009)等を基に作成した。設定したモデルは,以下の通りである。各セルは,自分の周囲に位置するセルの内1つをランダムに選択する(以下「相手」と記す)。次に,自分と相手の決定行列を組み合わせる。そして,パレート効率的な組み合わせが成立するように,自らの状態を変容させる。「パレート効率的な組み合わせ」とは,「その組み合わせから他の組み合わせに変えようとすると,自分か相手のいずれか(ないし双方)の満足度が下がってしまう」ものをいう(詳しくは田村・亀田(2004)等を参照)。もしもパレート効率的な組み合わせが複数ある場合は,以下の3つの方法のいずれかに基づいて,志向するパレート効率的な組み合わせを1つ決定する。共存的:自分と相手の満足度の合計が最も高い組み合わせを志向する,利他的:相手の満足度が最大となる組み合わせを志向する,利己的:自分の満足度が最大となる組み合わせを志向する。これでも該当する組み合わせが複数ある場合は,その中からランダムに1つを選択する。

セルの状態変容は全セル同時に行い,1試行につき第200ステップまで実施し(状態変容を199回繰り返した),1つの条件につき100試行を行った。「各マトリクスにBreaking状態のセルが占める割合」の全ステップ平均を「逸脱率」とし(Deguchi(2014)と同様),これをシミュレーションの出力とした。

(2) 質問紙調査

中学生や大学生を対象に,個々人が持つ「決定行列」を,出口(2014d)と同様の方法で測定した。具体的には,例えば「自分は信号を守っているのに,周囲の人は守っていない」といった仮定の状況を提示して,これに対する満足度を7段階評定で回答してもらった。また,逸脱行動の頻度や規範意識(ある行動を「良い」と思うか,「まずい」と思うか)も,出口・吉田(2005)等の尺度(5段階評定)を用いて測定した。さらに,過去に本研究と同様の目的で収集された質問紙データ(e.g. 出口, 2013)も分析に用いた。

質問紙調査は,調査会社に委託して実施したものを除き,無記名で行った。調査会社に委託したもの(WEBでの調査を含む)については,報告者には回答者の氏名が伝わらない方法で実施した。また,質問紙の最初には,調査の目的についての説明だけでなく,回答したくない項目については記入しなくても良いこと等についても記載した。

4. 研究成果

(1) モデルの妥当性

大学生を対象とした質問紙調査(有効回答者数341名)のデータをシミュレーションに入力し,前述の3つのモデル(共存的,利他的,利己的)を用いて,それぞれの出力(予測値)を求めた(出口, 2015b)。そして,シミュレーションによる「予測値」と質問紙による「実測値」との相関係数を算出した。その結果,「利他的」なモデルには複数の高い相関が示された。一方,「利己的」なモデルについては,有意な相関は,さほど示されなかった。さらに,これと同様の分析を,中学生を対象とした質問紙調査のデータ(e.g. 出口, 2013)を用いて実施した(出口, 2014a)。その結果,大学生の場合とは逆に,「利他的」よりも「利己的」の方に,多くの有意な相関が示された。

このことから,モデルの妥当性は逸脱行動を行う者の発達段階によって異なる可能性が考えられた。しかし,いずれのモデルにおいても少なくとも1つ以上の有意な正の相関が示されたことから,ある程度の妥当性を有していると推測される。

さらに,実験的に作成された決定行列を用いて,シミュレーションの設定と出力との関連について検討した。具体的には,状態変容の際に決定行列を使用する確率である「M-prob」を0(全く使用しない)から1(常に使用する)の間で変化させ(決定行列を使用しない場合,各セルは自分の周囲にある多数派のセルと同じ状態に変化する),これと出力(逸脱率)との関連を分析した。その結果,M-probが僅かに増加するだけで逸脱率が急激に上昇する「閾値」の存在が示唆された(出口, 2017a, 2017b)。この「閾値」は,「自分の態度と他者の行動を考慮するモデル」(Deguchi, 2014)でも確認されており,逸脱行動のシミュレーションにおいては,比較的一般的なものである可能性が考えられる(出口, 2017a, 2017b)。

(2) 「他者の態度」は把握可能か?

「他者の態度」を参照するモデルは,逸脱行動に対する他者の態度を正確に推測できることが前提となっている。この「正確さ」について検討するため,「他者の規範意識」と「自分が推測する他者の規範意識」の関連を,質問紙調査によって検討した。具体的には,質問紙を配付した際,「一緒に授業を受けている人」や「隣に座っている人」(他者)の質問紙番号を自分の質問紙に記載してもらった。さらに,「自分の規範意識」とともに,「他者の規範意識」を推測して回答するように求めた。そして,(自分が)推測して回答した「他者の規範意識」(すなわち「推測された」他者の規範意識)と他者が回答した「自分の規範意識」(すなわち「実際の」他者の規範意識)との相関係数を算出した。その結果,大学生(出口, 2018a)・中学生(出口,

2018b)のいずれにも、顕著な相関は示されなかった。さらに、母子(小学校・中学校・高等学校の児童生徒とその母親)592名296組を対象とした質問紙調査(出口, 2017e)も行った(データ収集は調査会社に委託)。分析の結果、有意な正の相関が示されたのは「中学生と高校生が持つ規範意識」と「母親が推測する子どもの規範意識」、および「高校生の母親が持つ規範意識」と「子どもが推測する母親の規範意識」のみであり、相関係数は最大でも.46と高いとはみなしにくい値であった。また、小学生の子と母については、有意な相関は一切示されなかった。

このことから、「あることを良いと思うかまずいと思うか」という、比較的シンプルな態度(規範意識)であっても、これを正確に把握することは難しい可能性が示唆された。シミュレーションのモデルは、「4つの状況における満足度」という、より複雑な「他者の態度」(決定行列)が推測できることを前提としているが、これを「前提」とすることが妥当か否かについては、さらなる検討が必要であると考えられる。

一方、個人内の態度(「規範意識」や「決定行列」と、自分の「行動」(逸脱頻度)との関係について分析した結果、両者には統計的に有意な関連が示された(e.g. 出口, 2018a, 2018b)。そして、「他者の行動」と「自分の行動」との間にも、有意な相関が見られた(出口, 2018a, 2018b)。

このことから、「他者の態度 他者の行動 自分の行動」というプロセスで、他者の態度は間接的に自分の行動に影響を与えていると推測される。これに関連して、「自分の態度と他者の行動」を考慮するモデル(Deguchi, 2014)は、「他者の態度」を全く考慮していないことはなく、「他者の態度を、他者の行動を媒介させて『間接的に』考慮しつつ、自らの行動を規定するモデル」であると捉え直すことも可能であろう(このような「他者の態度を間接的に考慮するモデル」で算出した予測値と、実測値(出口(2018b)等の質問紙データ)との関連も分析したところ(Deguchi, in press)、正の相関が示され、一定の妥当性を持つことが示唆された)。

また、個人の態度(決定行列)と逸脱頻度との関連については、個人レベルだけでなく、集団レベルでの分析も行った(出口, 2018b)。その結果、ある集団内における逸脱頻度を規定しているのは、「逸脱行動に対する否定的な態度」(「遵守的な態度」)を持った一部(全体の3割程度)の成員であることが示唆された。一方、逸脱行動に対して否定的・肯定的いずれの態度も有していない「同調的」な態度を持つ者は全体の半数近くを占めていたが、彼ら/彼女らが集団全体の逸脱行動を規定している傾向は示されなかった。

(3) 「逸脱行動」抑制のための授業案作成

これまでの研究から得られた知見などを

基に、逸脱行動を抑制するための授業案を作成した。具体的には、質問紙調査の分析結果やシミュレーション用のプログラム等を教材として使い、逸脱行動が集団内に広がる過程などについて解説した(このプログラムは、ステップごとの各セルの変化を、リアルタイムで表示させることができ、これにより逸脱行動が集団内に広まっていく過程を可視化できる)。

大学生を対象に90分程度の授業を実施し、効果を測定するために、授業開始直後と終了後に匿名式の質問紙調査を実施した(有効回答数21名)。その結果、授業の難易度(5段階評定)に対しては、21名中7名が「3. 普通」、11名が「2. やや難しい」、3名が「1. 難しい」と回答した。授業前後の規範意識の変化を分析したところ、「難しい」と回答した者(「やや難しい」ないし「難しい」を選択した者を合わせて分析)には、有意な変化は示されなかった。一方、「普通」と回答した者については、逸脱行動に対して、より否定的な方向(「まずい」ことと考える)に変化した(すなわち規範意識が高くなった)ことが示された。ただし、授業前後の規範意識の差は.19(7種類の逸脱行動における平均値。授業前2.02、授業後1.83)であり、「大きな変化があった」とはみなしがたい部分もある。

なお、授業内容に対する関心を測定した結果、5段階評価中、「5. 興味深い」は11名、「4. やや興味深い」は10名であった。また、「授業を受けて考えたことなど」に関する自由記述への回答には、「ある問題について考えるとき、個人個人だけでなく集団を見る必要があるのだと分かった」(原文ママ)という、逸脱行動について考える際の「視点」が得られたことを示唆するものもあった。今後は、規範意識以外の変数への授業の効果にも着目することが重要と考えられる。

これらのことから、授業内容自体は学生の興味を引くものであったものの、その内容を十分に理解できないと規範意識を高めることができない可能性が示唆された。このため、授業の難易度を平易なものとし、より多くの者に効果を持つものとしていく方法も探っていく必要がある。

これに関連して、シミュレーションの過程を分かりやすく提示する方法についての検討を行った。これまでの規範逸脱行動に関するシミュレーションでは、2次元マトリクスが使用されることが多かった(e.g. Deguchi, 2014)。前述のように、本研究での1試行は200ステップで構成されており、2次元マトリクスを用いた場合、全過程を正確に提示するためには基本的に200枚のマトリクスが必要となる。そこで、1次元マトリクスを用いたシミュレーション(図1。「自分の態度と他者の行動を考慮するモデル」の試行例)を試みた(e.g. 出口, 印刷中)。1次元マトリクスを用いると、マトリクスの空間にあてる次元は1つで済み、残りの1次元を時間的な変化の

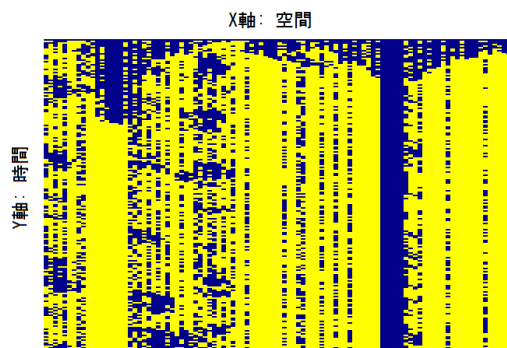


図1 1次元マトリクスによるシミュレーションの過程
(明るい点はBreaking, 暗い点はObeying状態)

提示にあてることによって、1枚の図によって全過程を示すことができる(e.g. Wolfram, 1983)。分析の結果、セルの状態変容の際に参照する「セルの数」を2次元マトリクスによる場合と同数に設定することで、1次元マトリクスを用いても同様の出力を得られる可能性が示唆された。

この他、逸脱行動に対する具体的な対応方法について検討するため、中学校・高等学校の教員300名を対象に、授業中の私語への対応と生徒の反応に関するWEB調査(データ収集は調査会社に委託)を行った。分析結果は、平成30年度の学会において発表する予定であり、引き続き、関連する研究を行っていく計画である。

<引用文献>

(「5. 主な発表論文等」に記載されているもの以外)

Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. NY: Basic Books. (アクセルロッド, R. 松田裕之(訳) (1998).

つきあい方の科学: バクテリアから国際関係まで ミネルヴァ書房)

Axelrod, R. (1997). *The Complexity of Cooperation*. Princeton University Press. (アクセルロッド, R. 寺野隆雄(監訳)(2003). 対立と協調の科学: エージェント・ベース・モデルによる複雑系の解明 ダイアモンド社)

Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 1015–1026.

出口拓彦 (2009). 「他者の利得を考慮すること」が規範逸脱行動に及ぼす影響 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集, 430-431.

出口拓彦 (2013). 教室における規範逸脱行動拡散の過程: 質問紙調査とシミュレーションによる検討 日本心理学会第77回大会

出口拓彦 (2014d). 規範逸脱行動に対する行動基準と態度 教育実践開発研究

センター研究紀要, 23, 81-88.

Deguchi, T. (2014). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*, 32, 439-452.

出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 160-169.

Durmuscelebi, M., (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education*, 130, 377–383.

Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Latané, B., Nowak, A., & Liu, J.H. (1994). Measuring emergent social phenomena: dynamism, polarization, and clustering as order parameters of social systems. *Behavioral Science*, 39, 1-24.

Nowak, A., Szamrej, J., & Latané, B. (1990). From private attitude to public opinion: a dynamic theory of social impact. *Psychological Review*, 97, 362-376.

Osman, L., M. (1982). Conformity or compliance? A study of sex differences in pedestrian behavior. *British Journal of Social Psychology*, 21, 19-21.

Scodel, A., Minas, S., Ratoosh, P., & Lipetz, M. (1959). Some descriptive aspects of two-person non-zero-sum games. *Journal of Conflict Resolution*, 3, 114–119.

田村 亮・亀田達也 (2004). 「寡きを患えず, 均しからずを患う」?: グループの意思決定におけるパレート原理の作用 社会心理学研究, 20, 26-34.

Thibaut, J. W., & Kelley, H., H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.

ト部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究: リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, 47, 283-292.

Wolfram, S. (1983). Statistical mechanics of cellular automata. *Review of Modern Physics*, 55, 601-644. (Retrieved on Wolfram, S. (1994) *Cellular Automata and Complexity: Collected Papers by Stephen Wolfram*. Westview Press.)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

Deguchi, T. (in press). Analyzing the spread of rule-breaking behavior, with a focus on talking in class, based on decision matrices in a critical mass model with local interaction (tentative title). *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*.

出口拓彦 (印刷中). 1次元セル・オートマトン法を用いた問題行動のシミュレーション: 2次元セル・オートマトン法との相違に着目して 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 67.

出口拓彦 (2018a). 授業での規範逸脱行動における自分および周囲の他者が持つ規範意識の影響に関する縦断的研究 次世代教員養成センター研究紀要, 4, 119-127.

出口拓彦 (2018b). 教室における私語の頻度と規範意識・行動基準の関連: 個人レベルおよび集団レベルの影響に着目して 実験社会心理学研究, 57, 93-104. DOI: <https://doi.org/10.2130/jjesp.1705>

出口拓彦 (2017a). 公の場における問題行動のシミュレーション: 状態変容の規則における相違に着目して 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 66, 31-38. <http://hdl.handle.net/10105/00012906>

出口拓彦 (2017b). 教室における問題行動のシミュレーション: 他者の態度に着目して 次世代教員養成センター研究紀要, 3, 31-40. <http://hdl.handle.net/10105/00012849>

出口拓彦 (2016a). 教育場面における規範逸脱行動に対する態度: 推測された他者の態度に着目して 次世代教員養成センター研究紀要, 2, 1-8. <http://hdl.handle.net/10105/10983>

出口拓彦 (2015a). 教室における規範逸脱行動に関する行動基準と態度: 「周囲の他者」に着目して 次世代教員養成センター研究紀要, 1, 127-134. <http://hdl.handle.net/10105/10947>

〔学会発表〕(計 13 件)

出口拓彦 (2017c). 規範逸脱行動の1次元および2次元セル・オートマトン法によるシミュレーション: 逸脱率および空間的収束に関する指標に着目して 日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会論文報告号 2017年秋号, 44-47.

出口拓彦 (2017d). ローカルな相互作用による限界質量モデルの妥当性検討: セル・オートマトン法によるシミュレーションの出力と質問紙による実測値の関連 日本社会心理学会第58回大会発表論文集.

出口拓彦 (2017e). 規範逸脱行動に関

する規範意識および行動基準における母子間の関連 日本教育心理学会第59回総会発表論文集.

Deguchi, T. (2017f). *Effects of classmates' attitudes and behaviours on students' classroom misbehaviours*. Poster session presented at the 15th European Congress of Psychology (P9.2.17), Nederland.

出口拓彦 (2016b). 公共の場における規範逸脱行動に対する中学生の態度と逸脱頻度の関連: 「周囲にいる他者」の態度に着目して 日本教育心理学会第58回総会発表論文集.

出口拓彦 (2016c). 規範「遵守」「逸脱」的な態度を持つ生徒の人数と学級風土の関連: 学級集団の構成に着目して 日本社会心理学会第57回大会発表論文集.

Deguchi, T. (2016d). *Effects of students' own and their neighbors' attitudes on rule-breaking behaviors in educational settings*. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology (PS28P-04-363), Japan.

出口拓彦 (2015b). 規範逸脱行動に関するシミュレーション・モデルの妥当性検討: シミュレーションによる予測値は質問紙による実測値と一致するのか? 日本心理学会第79回大会発表論文集.

出口拓彦 (2015c). 規範逸脱行動に対する態度と適応感の関連: 「他者の逸脱頻度」に着目して 日本教育心理学会第57回総会発表論文集, 312.

Deguchi, T. (2015d). *Effects of individual and situational factors on rule-breaking behaviours in public space*. Poster session presented at the 14th European Congress of Psychology, Italy.

出口拓彦 (2014a). 規範逸脱行動の拡散過程モデルに対する妥当性検討: 「隣に座っている他者」を考慮する方法に着目して 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 437.

出口拓彦 (2014b). 質問紙データを用いたシミュレーションの妥当性検討: 規範逸脱行動に着目して 日本心理学会第78回大会発表論文集.

出口拓彦 (2014c). 規範逸脱行動に関する行動基準と逸脱行動の拡散過程 日本社会心理学会第55回大会発表論文集, 64.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出口 拓彦 (DEGUCHI, Takuhiko)
奈良教育大学・学校教育講座・准教授
研究者番号: 90382465